YOUNG EYES
全日会報

発行
全日本学生写真連盟
発行人
全日本学生写真連盟委員長
藤本優成

四十一年度の展望
全日代表委員総会から

一九六五年……それはその時点に至るまで、写真サークル全般を覆っていた全体的展望の欠如と主体性の喪失から、動的で、主体的で発展的な行動へと転換するために、また現実とのかかわりあいのなかでの個（個人）の問題をとりあげ、実質的で具体的な運動へと展開し、写真を思考的手段として考え、突き詰め解明していくことにあった。

キャンペーンはとりわけ六五年における全日の諸活動の主体として推進され、腐敗しきった既成の組織のなかでの個がいかなる方法を備え、現実とのかかわりあいのなかでどのように対処していくかを提起したこと、集団を形成する最小単位の個が集団のなかで変わりながらまた集団をも変えていくということ、この二つのことがらを私たちは忘れてはならない。

しかし全てが転倒し混乱した現実のなかで自己を見失いつつあった個が現実を把握し、対処する方法を自らが具備した時、既成の組織はもはや個にとって何の意味をももたなくなり、有効な手段としても存在しえなくなってしまい、その時の個は周囲の人々から奇異な存在としてあつかわれてしまうサークルを形成する個の問題（サークルの組織というものが個というものを除いては成りたちえない）から個が真の個であり、集団であることに戻すためのあらゆる作業を、最終的には個人々々のうえにかかわる恒常的なものをいかに変えていくかということと、個というものが失われずに、集団が変わり得るだけのシステム（新入生の受け入れ体制からはじまって年間の活動企画）を一環した厳密なるプランニイングのもとに作りあげることができるかどうかということがこれからの課題として囑望されている。

こうした緊迫した状況のなかで全日本学生写真連盟は一月総会を開催した。

〃全日全体のあり方自体を確立〃させていくにはどうしたらよいかということを議題の前提として、次の項目についての内容を検討し協議した。

イ、全日組織の自立と拡充（短大高校含む）

連盟内の質的充実をはかり、短大・高校サークルに関連した問題を検討し、会員の質的活動を促進する。そして内と外との関係を正確に把握して主体的な活動をおこなう。

ロ、地区連盟の企画の充実化

地区連盟と全日本部との企画を検討、調整し、かみ合わせることによってより具体的で緻密な企画内容に発展させる

ハ、地区間連絡の徹底

各地区の活動状況を他地区へ伝え、地区相互の情勢を把握し活動を円滑にするために地区間の連絡を緊密にする。

ニ、キャンペーンの推進方法の確立

キャンペーン委員会の組織の強化を行ない、内容的充実をはかり、推進方法を確立する。

ホ、会報の充実化

従来の会報を機関紙化して、発行部数を増し会員にアッピールしていく。

ヘ、漸次的な全日の独立採算制の確立化

あらゆる形での財源確保

チ、写真理論とサークル論の追求

全日活動企画に多くの論争の機会を設ける。

このようなことがらから写真サークルは運営と作画活動が個の主体的な行動を促進するための組織であり、個というものが具体的なかかわりあいのなかで発展的に変わっていくための組織でなくしては個にとって無意味で惰性的で形骸化された組織となってしまう。

いまや全日全体の組織形態（各サークル・各支部・各地区・全日本部）がそれぞれの機能をもち、その機能が幾重にも重り合い、有機的に結びついた組織へと発展させ、立体的・復合的な組織体系を確立していかねばならない。

写真サークルの欠乏

委員長談

現在の写真サークルにおける委員会の実態は官僚的で支配者的で観念的で形式的で、それが組織や運営から派生してサークル活動の中心となっている。このことからクラブ活動（要視さ＝委員会）において最も重れ、一年間の活動プランも、発表の場である展覧会に傾倒しているのである。そのようなサークルて属しにいる個はそのサークルに対して何の興味も示さず、何の意味も持たなくなってしまう。さらにそのことに気がついた時、個は自らその集団から離れていくかそれともその集団に対して積極的にトライを貫行していくしかしトライを貫行した時、その個は喜劇か悲劇の主役を演じて、笑い者として扱われてしまうのだ。私たちはこのような状態から脱却するために、前年度の具体的な検証をおこなったうえでの体系的な年間の活動企画（新入生指導・合宿・役員の引き継ぎ等を含む）をたてなければならない。

そして早急に私たちは、今までのサークルの態勢を立て直す作業にとりかからなければならない。それはゲリラ戦のごとく、目に見えないものとの対決の連続である。

本部代表委員長　藤本　優成

本部行事経過および予定

十一月下旬　キャンペーン「状況」ー一九六五の出版のための写真のレイアウト・編集終了

十二月中旬　次期全日代表委員長各地区を視察、四十一年度の構想についての打ち各わせを行った。

一月十四〜十六日　全日総会開かれる。場所・静岡県伊東市片瀬。

一月二十六〜二月二日　全日本学生写真連盟コンテスト発表展示。フォトサロン。

二月九〜十六日　第三回カメラキャンペーン「教育問題」発表展示・フォトサロン

二月下旬　第五十四号機関紙発行

三月五〜七日　リーダース合宿、全国三ヵ所で各写真サークルのリーダーの参加のもとにおこなう。一回目は関西・中部・関東合同で静岡で開かれる。

三月十二〜十四日　リーダース合宿、静岡に続いて中国・四国・九州においてもおこなう。場所は広島。東北・北海道のリーダース合宿は未定。

四月上旬　第五十五号機関紙発行

四月中旬　テキスト販売

五〜七月　スライドをつかって、写真を見る会をおこなう。（未定）

六月上旬　第五十六号機関紙

九月上旬　第五十七号機関紙

十月中旬　キャンペーン写真選択合宿、続いて編集合宿をおこなう

十一月上旬　第五十八号機関紙発行

論説

いつも、私達は　個と連帯・個と集団・組織と人間・と云った、問題にぶつかり、それを本質的に解決する方法も、手がかりも得られず、座折し、ある者は崩れ去り又、ある者は本質的解決をあきらめ、姿を変えて順応者となった。

そんな中で、私達は、個と連帯個と集団に付いて、一つの考えに至った。

その具体的な例として「状況」ー一九六五がある。

それは、個としての人間が生きている時、その個としての現実が存在し、個としての人間が現実とたえず、互に変質しながら、対話し、現実に対しての認識を深め、把握し、試行錯誤をしながら、確かなものとして行く、その過程において写真は撮られる。

個が個としての現実と、せい一っぱい向きあった、その状況において撮られた写真を／現実との対話を／問題意識を／数多く繋き合わせて行った時、そこには個別から、発展したある現実の総体が生まれる。

そこに現らわれた現実の状況をある時間で区切り、本で再現しようとしたのが「状況」ー一九六五である。

色々の問題がかさなり合っている中で、それを実施するために私達は二つの原則を上げた。文化サークルの原則である〃最終決定権は個人に〃と写真の原則である、〃カメラマンが自分の現実との対決に対しての興味（問題意識）をもたない時、決して作品は誕生しない〃この二つを持って私達はキャンペーンを進めた。

そこでは、毎日が具体的な現実との戦いの中で過ぎて行った。

そんな過程の中で、八ヵ岳で編集に要する写真を選択する合宿が行われた。

まず、私達は、写真について話した。そこでは、個々が皆、その見方、考え方が異っており興味深かかった。

翌日、写真の分類が始まった〃自分がその写真を見て、何かを感触した〃と思うものと、そうでないものと分ける事から始まり、一人、一人が二千五百枚余を全部見た、否、分類と例会がくり返し行なわれたが、その度ごとに、くり返し見た。

そこでは、私が持っていた、現実に対する、認識が、次々と写真が目の前に現われる度に、別のもので、別の方法で、荒々しく、たんねんにほじくり、計られ、真にしごかれる事が展開した。

次々に現らわれて来るものにひっしにタックルする私が引きはなされ、たたきつけられる事のくり返しに、私は戸惑い、自己を偽証しようとした、が、そんな小生意気な事が通用する相手ではなかった。

そんな訳で私は疲かれ意識がもうろうとして来る中でただひっしに、真っ当に、写真と一つ一つ取り組むより仕方なかった写真にこんなにまでやられるとは思わなかった。私がこんな目に合ったのは初めてであった

その分類の後、今、体験した事が何んであったかをようやく考えようとした時、次の例会が始まり、私は、前にもまして、皆がひっしと、自分自身の問題と取り組んでいる中で、次々に激しく、私を襲って来るものにもまれた。そんな事のくり返しの中で、私自身認識を深め、変わって行った。

写真は分類され、合宿は終った

この合宿で私達が得たものは、〃何かにふれ得たと云うずっしりとした手ごたえ〃と〃集団の中で個が、個であることが失なわれずに、発展的に変わり得る〃と云う確信であった。

かつて集団が何かを行い、動き変わって行く時、それを構成する一人一人の意識とは、明確には繋がらぬまま「全体が変わった」と考えられて来た。そこには個の問題は明確には、考えられず、業務の目的のみが遂行され得たが、私達のこの合宿においては、集団の基礎単位である個が連帯の中で一人、一人が孤立し、独立して写真を選ぶ事を行った。その選ぶ事は自分自身の問題を追求する事、つまり、現実に対し、問題意識を、考えを、ぶつける事であった。

〃選ぶ〃という、一つの行為を通じ、個が個としての働きをしながら、全く、個、一人、一人が変わって行く「全体が変わった」というより逆に「全ての個が変った」といった感じであった。

何がどうであるか解らない位入り組んだ中で、確かなことは今、目の前に投げだされている問題に皆が皆、その問題をはっきりさせることが、自分自身の問題をはっきりさせるように、首を突っ込んでいた。そこでは具体的に〃誰かがこういった〃時。〃目の前にこの写真とその写真〃があり〃その写真について他の誰かがそういって〃といった。すごく、具体的なもののかかわりのなかで、集団の中で、一人一人が発展に変わり得ることを、実際に、なりはたすことができた事でした。

これは、ものすごく生きていて全ての具体的なもののかかわりでなりたち、誰にでもできるものではなく、又、人が集まり、こうすれば出きると云うものでもなく、なりたつ時になりたつと云う位再現は困難な事であろうが、〃組織の中にあっても、個が個である事が全く失なわれずに、発展的に捉えられ、変って行く事ができ得る〃という確信。これは、長い間サークルの運営、それから来た、共同制作の考え方、又はそのシステムにおいて、長い間確信を得られぬまま混乱を続けて来た私達に取って、又、社会にとっても、それは個と連帯、個と集団、組織と人間と云ったかかわりの中で、暮す私達にとって、人間と社会とのかかわり方において、大きな可能性を持った原形であり、多くの事に対する、手がかりである。

若い世代の写真雑誌
カメラ時代
CAMERA AGE '66

3月号発売中
▶特集／的確な表現をつかむ研究
映像心理学
▶現代写真10傑集══3
細江英公自選作品集
能弁な野性・アンチストーリーのストーリー
▶シンポジウム　新しい写真の共同研究
日本1966　構成＝福島辰夫
▶写真実技══フィルム篇
べからず100題
八木原茂樹
230円

●写真時評
これがベスト3
●エッセイ
なぜ撮るか！
松本俊夫
●半期賞作品発表
虚式＝田中長徳
●今月のコンテスト
第12回全日本学生
読者の新聞写真ほか
・ジャーナル
テレモアズームほか

全日カメラキャンペーンの成果
状況――1965
1965年とは一体いかなる年であつたのか？
この本はその間
'64・10〜'65・9　に全日会員が撮影した作品
〃　の刊行物から抜き書きした引用文
〃　の詳細な国内外の年表
1965　に関する論文
をインパクトさせ、正面から捉えようとするものである
￥280（送料別）詳細は各地区連盟まで

第二回　サークルにおける討論会にて好評
共同制作
好評であった、第一回に続き、関東学生写真連盟企画局は、さらに、数回の共同制作シンポジュームを開き、その新しい可能性を、その新しい方向を、深く、追究し、第二回共同制作を出版した。

全日が主催する

リーダース合宿に参加しよう

主旨

高度に発達した、物質文明の中で、その社会に於いて、その機構の中で、人間が見失なわれている現代、その中で、集団（小社会）として、又、組織としてある各写真サークル、又、"停滞している""行き詰っている"と言われている学生写真、その時点で、各リーダー達は、サークルの中で、どのようにしているのだろうか、又、これから、どのようにして行くのが良いのだろうか。

サークルについて、又、写真について、リーダー相互で話し合い色々の問題を、明確にして、解決して行きたい。

企画

写真サークルにおいてその活動企画がたえず、写真と密着した所で組まれているようにこの合宿においても、具体的に写真を随時用いて行います。

昨年、八ケ岳での合宿に参加した私達は、写真を選ぶ作業を通じ色々な、意見や写真が、ものすごく入り組んだ中で、自分の目の前に現われて来る。自分自身の問題とせいいっぱい向き合い、一つ一つ取り組んではっきりさせて行く時、自分が、どんどん認識を深めるまで、脱皮でもするように、変わって行った事、また、そこにいた全ての人が一人一人が、発展的に変わって行く事を体験しました。

今度行う合宿も、そのように、参加する者にとって、またその所属するサークルに取って、多くの有意義な事であるようにしたい。

また講師として、福島辰夫氏にご出席して戴きます。

なお、参加対称は大学の写真サークルのリーダーにします。

話し合いの項目（概略）

・例会

・写真を用いたシンポジューム

写真の話、写真サークルのリーダー達は、どのようにして、写真を評価しているのか

写真評価の基準

・サークルの本質

現在あるサークルはどうか

サークルはどうあれば良いのか

・組織と運営

写真サークルの組織と運営の実践について

年間の活動、行事について

・新入生対策

毎年起る大きな問題なので、一項としてあげました。

新入生にどう対処するか

・制作論

単写真、組写真、共同制作など

参加者は、自分のサークルで問題となっている写真、皆で話し合いたい写真、自分が今考えている写真等を、持って来て下さい。

地区＝関東・中部・関西
期日＝三月五日午後二時開始
七日午後解散
場所＝静岡県新居町浜名湖畔新居弁天臨海学園「清風荘」TEL新居一二五
宿泊 三食付二泊三日一、四〇〇円
交通 東海道線新居町下車、駅前より国鉄バス十五分新居弁天下車

地区＝中国・四国・九州
期日＝三月十二日午後二時開始
十四日午後解散
場所＝広島県佐伯郡宮島町 まこと会館
TEL宮島三二八
宿泊 三食付二泊三日一、五五〇円
交通 山陽本線みやじまぐち下車
みやじまぐちより船十分

その他の経費、若干

申し込みは、各地区連盟に

北海道と東北が合同で行う予定ですが、まだ、期日、場所が決っておりません。

状況 一九六六によせて

現代文明における最も切実なる危機は高度に発達し、複雑化されたorganizationと人間との差異の断続である。又、そのことは、人間の間のコミュニケーションをも不在化している。そして、個としての人間の役割は、人間化に取り変えられようとしているのである。

このような現代状況において、われわれカメラサークル員は、いかに自己の主体を確立（個としての存在感）し、個と個のコミュニケートを回復しうるか、そして、写真というメカニズムを通して、文化運動を推進しうるか、考えてみよう。

では、文化とは何か、一般的に文化とは、人間が社界を形成しながら、その中でおこなっている活動の総体をいう。しかし、かならずしも、人間の活動自体が、すべて文化とはいいがたい。われわれが、真の文化といいうることができるのは、人間の活動の中で繰り返しおこなわれるもの、つまり、過去の既成概念を打ち破り、新しい概念の創造――過去の概念から新しい概念への不遍連続的な運動――である。

◇解明◇

われわれの生存している社会、つまり、現実は、あらゆる面（問題）を内包している。また、われわれも現実のあらゆる面（問題）を解き明かしたいと思います。しかし、単なる現実への客観的な、静的な、無意志的な態度からでは解明の糸口はみつからない。それは自己が主体的に、動的に、意識的に自己の現実を把握し、現実の諸事業にアプローチした時、可能となりうるのである。

◇全日カメラキャンペーン＝自己の主体◇

われわれは、写真というメカニズムを通して現実にアプローチしなければならない。（なぜなら、全日本学生写真連盟は、カメラサークル員の組織にほかならないからである。）

では、われわれは、いかに現実にアプローチしうるか、それは、自己の現時点の状況（状況とは、ヤスパーマによれば、科学と技術の対象である世界は、意識一般の対象であるから客体的、普遍的なものであって、個々人の生活に対して直接の意義をもたない。このような世界が他ならぬ私の世界として不可分となった時、それは、状況と呼ぶ。）を認識し、自己を洞察し、自己の存在を見つける。個人は、自己（主体）と環境（客体）との間で矛盾に対立を繰り返し、意識を変革しながら進歩がなされている。

われわれが、現実をカメラのファインダーを通して、外界の事物を捉えた時、そして、そのシャッターを切る時、彼の意識の総体がそこにかかっているからである。そして、自己と現実（被写体）は切り離して考えることのできない状況が示されるのである。写真は技術であるとともに、彼（作者）の思想でもなければならないからである。

（全日キャンペーン委員長
鈴木政功）

キャンペーン合宿に参加して

キャンペーン「状況―一九六五」の合宿ほど私にいろいろなことを教えてくれた合宿はありませんでした。

十月下旬、合宿地である長野へ授業など放ってかけつけました。二千五百余枚もの写真を見ることができるということが第一の魅力でした。それも、全国各地、文字通り北海道から九州まで、そして期待したとおり、種々様々、一人一人の人間がみんな違うように二千五百枚の写真が二千五百枚とも独得のもそでした。そこへ集まって来た人もみんな違いました。写真に対する考え方、写真の見方も違いました。

第一日目、二日目、とにかく参加者全員が写真をみました。写真をみるということがどんなことかわかってきたのは相当たってからでした。同じ写真を何度も、何度も見る、そうするうちに前に見た時と、二度目に見た時は、写真のもつものが変ってきました。前に見た時は、確かにこの写真は、私にとって可成りの意味をもつ写真でした。しかし、二度目に見るその写真はどうでもよい写真であったりしました。また、その反対の場合もありました。そんな繰り返しがずっと続きました。二千五百枚のうち二千枚ほどみると、もうろうとしてきます。何が何なのか……。そんな状態でなおつづけました。でも私にとって、この合宿に参加した意味は、この後にもっとはっきりした時で現れました。それは、まるでノックアウト・パンチのような強烈なものでした。大学へ入って二年、ずっと写真を撮り、写真を見てきたつもりでした。おぼろげながら私自身にとっても写真のもつ意味も把握できたと思っていました。しかし、その強烈なパンチは、すべてをくつがえしました。まさにつもりはつもりでしかなかったということをイヤという程、おしえてくれました。その強烈なパンチは、たった二枚の写真でした。一枚は、子供の、一枚はポートレートでした。それまで、私の写真に対する考え方、写真という私のカテゴリーにはポートレートは存在していませんでした。その二枚の写真を一時間も二時間も、イヤ、一日中見てました。写真とニラメッコです。写真とニラメッコできるなんてこの時まで、思いもよりませんでした。写真が私の視線に耐え得るなんて！イヤとんでもない、耐えることが出来なかったのは私の方でした。写真に嘲笑されている自分を発見するだけでした。何ということだろう、今まで私は一体何をしてきたのか、現実・現実・現実なんて言葉は、私の頭の中のことでしかなかったのか、言葉だけの空回り二枚の写真は、現実ということを知ってました。「現実はきびしいもの、何んだ」とよく言います。大人に限ってそのような言葉を吐きます。それを聞く度にイヤーな感じがしたものです。「何も知らない奴に限って使いたがる」と。でもそんな大人もきっと知っていたのです。ちゃんと知っていたのです。知らなかったのは、ただ私だけでした。二枚の写真も全部知ってました。その、知るということは大変なことだったのです。二枚の写真の前で私が出来たことと言えば泣くことだけでした。どんなに大きな声でわめいても、泣いても私の前に二枚の写真は厳然としてそこにいました。相変らず同じ視線を私に向けて、二枚とも、そんなに、いい写真ではありませんでした。現実を知っているが故に、何かじっと耐えている。そのどうしょうもなさが響いてくるのです。そこで私は言いました。「あなたは、そうあるべきではありません」と。でも私がそう言ったことは、その写真にとっては、何の意味もなかったのです。全てを知っている写真と、何も知らない私、私の言う事は彼にとってお笑い草だったはずです。何故なら彼がなすべきことは、彼がちゃんと知っていたからです。

そんなショックのあと、また写真をみました。千枚のうちから三百枚選ぶのです。その日は徹夜でした。一晩中みんなけんかしていました。普段おとなしい人が一枚の写真を選ぶのに顔色を変えて主張しているのです。

ボロボロになって東京へ帰りました。十日間くらい放心状態でした。写真……一体何だろう。何のために私は写真を撮ってるのかしら……。そんな愚問が回転数の間違ったレコードのようにスローなぶった声が、一日中頭の中をまわっていました。十日たって私がしたことは、カメラを持ったことでした。そして又おきました。安易でした、余りに安易でした。問題を明確に意識的に把えようとしました。すべてが感覚的すぎたのですから……。

「記識するということは、自らの生身を切りきざみ、血を流すことだということも知りました。

（T生 関東）

一九六五を省みて

現代社会が裏づけられ、われわれ、否、人間を機械化し、画一化し、われわれみずからも、その機構の中へ自己の主体性を埋没し去ろうとしている。

このような今日的状況において、われわれ写真サークル員は、自己の主体性の確立のために運動を展開したのである。それは文化サークルの原則である"最終決定権は個人に"と写真の原則である"カメラマンが自分と現実との対決に対しての興味（問題意識）を持たない時、決して作品は誕生しない"という二つの原則に立脚して具体的運動（カメラ・キャンペーン）を推進したのである。

会員相互の自己の意識の総体つまり結果がこの本"状況―一九六五"である。

今や写真は単に、テクニックや絵づらでの表現の時間ではない。写真は技術であると共に、また、彼（作者）の思想でなければならない。なぜなら、われわれが感動を覚える作品には彼（作者）の意志の総体つまり思想が作品に脈々と流れているからである。

この本"状況―一九六五"は、カメラマンたる彼が、自己の現実を把握し、自己の問題意識に呵責なく疑問を課し、自己と現実との間で格闘（問題に対して矛盾を感じ、自己と他者とで対立し、葛藤を繰り返す）し、試行錯誤をした彼の生きた思想であり、彼の作品である。そして、自己に呵責な疑問を課したこの彼（作者）の意識の作品が、他者との関連において、相対立されたことによって、われわれの現実、否、日本の現実として、この本に露呈されている

われわれは、この本"状況―一九六五"を学生写真の一つの指針として、多くの人達が読み、活用していただきたい。又、多くのサークルにもテキストとして活用していただきたい。そして、作品の絵づらや、シャッターチャンスの良さや、画像のシャープさ等の表面的な絵的ではなく、彼（作者）が現実に直面した時の彼の現実との格闘ないし、葛藤の彼の意志の総体を見ていただきたい。この作者のハートを見ていただきたい。

彼（作者）が真剣に現実に向ってシャッターを切ったように、読者が作品を観るならば、この一つ一つの作品、否、それが総体立した総体が、つまり、一九六五の現実が読者の前に露呈されてくるでしょう。そこから、読者と作者とのコミユニケーションが始まるのです。

（全日本キャンペーン委員長
鈴木 政功）

短大写真部の現状

わが部は、約五十名の部員により構成されています。活動をするには少なくない部員数。しかし、充分なサークル活動がなされているかどうか……。

短大のサークル活動はいろいろな問題があるといわれています。その問題について考えてみますと時間的余裕があまりないということが一番大きな問題であり、それは技術的な面、その他あらゆる方面に影響してきます。短大ですので、少し写真のことを知ったかと思うとすぐ卒業という状態です。

一年間という短かい期間で写真に対する一応の知識を身につける位で、技術的な面、その他のことはうわべだけのことで、くわしいことは全くといっていい位無知に近い状態です。この調子で新入生を指導するのかと思うと、不安で責任の重さを痛感します。技術的な面の向上は経験を積まれた良い指導者を得なくては進歩はあまり期待できないと思います。また、一年、一年と活動がとぎれ、毎年々々同じことを繰り返しているように思え、淋しくなるばかりです。

去年の共同制作について挙げてみます。去年一年間の行事にあてられていたものの、夏休みに入ると活動がなくなり、写真の方も、夏休みという傾向になり、共同制作は、いつのまにか消え去っていました。また、写真に対して積極的態度がなく、部員の自覚がなされていなかった。それは、写真が好きかどうかというと、各個人個人の問題である。

今まで、短大の写真部だからということで、少し、甘えていたことがあると思う。

四年制大学と比較して、経験も少ないし、いろいろな、点で、いつも消極的であった。このことも原因して、活動がおろそかになっていたのであろう今後は、積極的態度で、写真に対して深く考え、充実した活動をしていきたい。

（長山美鳥・鈴峯女子短期大学）

全日顧問福島氏総会に出席す

福島辰夫氏は、片瀬白田で行なわれた、四十一年度全日総会に、一月十四日より、出席され、四十年度の問題点、ならびに四十一年企画について、各地区代表委員と懇談された。

本部企画 協議決定

三日間の全体的討議から、各地区間、全日本部の活動企画を総合的検討した結果本部活動企画は次のように協議決定された。機関紙はタブロイド版二面ないし四面で年五回（二、四、六、九、十月）発行、従来の会報から新聞に切り換え、発行回数・発行部数を増すことによって、会員との緊密化をはかり、全日（本部・地区支部活動の様子）の全体的状況を提示して、内部的充実を促進していく。テキストは一、歴史は何を教えるか。二、写真サークルのあり方。三、技術書、四、写真史年表五、共同制作Ⅰ、Ⅱ（関東学写連発刊）以上を出版していく。このテキストはクラブの活動企画に汲み入れ、研究資料として充分に役だつ本として出版していく。しかし全日本部は出版費用の資金不足により、本部の資金繰りが最も重要な課題となり、テキスト出版費用の資金繰りは本部一任となった。キャンペーンは「状況」―一九六五の本の販売の促進と販売組織の確立、一九六六キャンペーンは委員会組織の強化・確立（本部は引用文・年表製作委員会を設ける。写真合宿の前に委員合宿をおこなう）をはかり、各地区キャンペーン委員会との緊密化もはかることが重要となった。会員証の発行は全日全体の会員数、実質的活動数を正確に把握し、全日今後の資料としていく。全日コンも全日の体系的な行事として推進していく。リーダース合宿は数地区が一ヵ所に集まり、限られた時間内で、サークルの問題を自分のクラブの写真と種々の資料をもとにして今後のサークルのあり方を解明する。

クラブ運営と新入生指導について

今年もやがて私たちの学生・写真サークルは新入部員を迎える。しかし、いうまでもなく、私たち学生、写真サークル活動の腐敗はその極点に達っている。この状態に対してはさまざまな角度からの検討が各サークルでは加えられていると思う。たとえ意識的な把握がまだなされていないにしろ、日々の活動の一つ一つが微温の中で腐敗していく、硬直した死体の死臭を漂わせているはずだ。だから新入部員への対策も、いままでどおりの"旅館の客引き"のような"勧誘"からして、その考え方をかえねばならない。つまり、はっきりしたこの状態を打開すべき意欲物な目標と計画をもたぬまま新入部員を"勧誘"することは、サギ的行為である。従来のごとく入会金と二、三ヵ月の部費目当て（まるでアパートの敷金と権利金のようだ）と、大勢入ればいろいろいるよといった考え方の上には、サークルはますます麻雀、スキー、スケート、ボーリングの計画設案待合せ所になってしまうのだ。変革をめざすことなく分類しか講義しえない。（W大の学生は"授業料値上げ反対闘争"の中で「総長は卒業する時には大卒のレッテルをはって送り出してやる」といったと憤慨している）学内からマイナスに傾斜した微温でガラス細の障子、白夜の座標にサークルは存在してはならない。逆に変革の意欲を失った大学教育にその意欲を回復させるべき位置を占めるべきなのだ。

だから私たちは、こと新入部員に関する限りでも、これまでの活動の総括（展覧会を主要なものとすることが、現在それ自体全く発表の意味を喪失しており、したがって、それを主体とする限り、サークル活動の全体が装飾的であり根本的に考え直さなければならないとする断固たる決意）を終え、新入部員を迎える前に本年度の計画（とりわけ、現在の打開は、内部充実のための長期的プログラムとそのための一年度交代の執行機関と異なる長期永続的な——つまり、一年生から四年生までを含む終身委員資格の企画機関を必要としている）をつくりあげねばならない。そういった総括と方針の結論は、一つの集積的期待を新入部員にかけることになるだろう。新しい長期的方針を具現化するものはこれから四年間の可能性をもつ新入部員である。充実に日常作画活動を行ないうる多数の部員を形成することに、現在のクラブは全力を注ぐべきである。これに対して現在のサークルは多くの努力と犠牲を払うべきである。

いかにすべきか。夏の合宿までの研修制度の採用である。それは次のようなプロセスで行なわれる。

まず、新入生に対して研修を行なう指導員グループをつくる。大体理想的には新入部員三、四人に一人の割合の人数が適切である。

また、自分が指導員になることによって、自分自身広い意味での成長をはかる自信のある人——それ故指導員の業務を義務と考えず権利と考える人が適切である。学年としては三、四年生、とりわけ四年生がいい。大体において四年生は三年生時代の役員を退いた後お役ご免と活動を怠るものだが、しかし、四年生は作画上の充実をもっている。これを利用すべきである。このような指導員グループが中心になって暗室技術・写真用語・写真の歴史に関するパンフレットを作成する。次にそのグループで新入部員と話し合って、おのおのの新入部員の性格を把握する話し合いのあとはもちろん指導員グループで印象交換を行なう。そして、次に指導員が分担して作家・作品レポート作成して新入部員に対してすぐれた作品を数多く多角的にみせ、この印象交換を行なう。これはこの研修制度にとって重要なポイントである。

こういった名作をみせることによって、新入部員は確実な感動を意識しうるし、それはとりもなおさずそれから四年間の作画意欲の支柱となるからである。もちろんこの会の後も指導員同志の意見交換を行なう。そして、ここにおいて指導の意志と責任においてグループ分けを行なう。この際、問題となるのは、指導員の適不適が新入生に対して大きな影響を与えるという危険である。（しかし、もちろん、対人的な密着以外に人間を成長変革させるものはないという前提は認めなければならない）この欠陥を埋めるために、全体集会—グループ討論の循環を行なうこのグループごとに集まってこれまでの経過総括を行なう。これは前年の総括にあたる。そして、この総括を持ちよって指導員は前年の全体総括を行なう。そして、これを執行部に提出する。そして、執行部の意志を介入させることができる。次に先のパンフレットを用いて写真の歴史の全体的な講義と質疑応答を行なう。このあとグループごとに集まってより綿密な写真の歴史についての討論を行なう。ここまで理論的な研修を終えて実施に移る。すなわち、グループごとに撮影に出かける。そして、そして、この撮影されたフィルムのDCPEの指導を行なう。この後この作品を通して作品の批評をグループごとに行なう。一枚々々そして、いくえにも比較しつつ。そして、その全体の批評会を行なう。それ以後はこの実際の撮影と平行しつつ、これまでのクラブの作品のみることや雑誌、展覧会、映画をみに行く。最後にクラブ全体の例会に作品を提出して全体の批評をうける。だからこの例会は五月ではなく、六月の例会となろう。

（M生）

写真サークルを一見する

＝短　大＝

短期大学は、四年制の大学と違って、二年間という特異な条件であり、この条件の下において、いかにして各個人々々が写真に対してより深く追究し、そして、各個人の現実に向ってアタックするかということにある。このためには個人々々が純粋な気持で彼自身の身の回りに目を向けて、彼自身の現実を把握すべく行動を起こすことである。それは、いいかえると彼自身の生活態度とでもいうべきものであろう。次に彼自身が純粋に疑問を持った何かを「何故か」「何故こうなったのだろうか」と彼自身自問自答し、彼自身の現実に向ってアタックすべく、シャッターを押すことであろう。このようにすれば、自己の主体性の確立に対して、一歩近ずくことであろう。

まず、短期大学のクラブ員が、サークルにおいて「何をなすべきか」を考える必要がある。その原因を究明する動機として、最初にサークルに入った動機を思い起こすことも必要であろうし、また、短期大学サークルのあり方を再検討すべきことも必要があろうし、サークルにおける各クラブ員の生活態度というものを考えることも必要であろう。さすれば写真は単なる道楽趣味としてのものではなくして、彼自身の生活を知る一つの手段となるであろう。

現在の四年制大学におけるサークルの運営者は、大体において二年生の終りから三年生の終りまでの部員が活動しているといってよい。しかし、短期大学は在学年数が二年間であり、クラブ運営者は一年生の終りから二年生の終りまでの部員がおこなっているといってよい。この間の相違が短期大学写真サークルのあり方における決定的な要因となっている。

短期大学の二年生は、サークル運営者としてサークルの先頭に立って活動を行なわねばならないし彼自身の生活を知る手段としての写真を撮ることもなさなければならない。その上、各地区連盟にでて活動をしている者にとっては、彼自身の問題として活動を行なう上において、過大な重荷を背負うことにもなろう。さすれば、写真を撮ることは、彼自身にとって何を意味するかということを見失いがちである。このことは、単に彼自身の問題ではなくて、短期大学生すべての問題を含んでいるといっても決して過言ではなかろう。さあ！全国の短期大学生諸君、今こそ短期大学生のサークル員は何をなすべきかをよく考えて、実際の行動に移る時期ではなかろうか。

（K・T生）

写真を自分の物にしよう

私が、高校写真部に入部して、はや、三年になろうとしています。なぜ、写真部に入部したかといえば、ただ単に友達に誘われたからでしかないのです。写真部に入部する時、写真の技術でも何でもよいから、それを、追究しょうとして入って来る人は少ないと思います。しかし、そうゆう人は、写真がうまいというか、我々のように入ったものより、写真を理解しているともうせましょう。

入った当初は、気楽な気持で、写真活動をしていても、月日がたつにつれて、真に写真の持つ重要性や、写真の芸術性について考える時がなければ、いけないのではないでしょうか。また、写真部のリーダーたる先輩も、写真の技術はもちろんその事についてもおしえるというか、話すというか、対話の内に折り込むという事も、重要なのではないでしょうか、またそれらを推進するために、我々には、東京都高校写真連盟や、全日本学生写真連盟があるのではないでしょうか。

ではなぜ、写真を自分の物にしなければいけないのかともうせば写真は、口に変る。つまり、言葉に変る、無言の声ではないでしょうか。つまり、一枚の平凡な写真が、人々の涙をさそい、また、喜ばしたりもする時に、これは平凡から非凡になったともうせましょう。そうゆう写真を、我々高校写真部員は、撮るようにならなければいけない。また、これから我々の連盟活動も、クラブの活動もそういう方向に進まなければいけないのではないでしょうか。どういう具合にして写真を自分の者にするかといえば、やはり、被写体に対する自分の考えを持つことです。つまり、ある事物を見て、それについて自分は、こう考えるという結論が出た時に、ではどういうふうに、撮れば、その問題点がネガの上にあらわせるかと考え、その結論のもとで写真を撮る。そうすれば、きっと真の作品、つまり自分の考えていることが、無言のうちに、おのずと、一枚の印画紙の上にでるのではないでしょうか

その思考力を伸すために、クラブでも、連盟でも、もっと、もっと話し合いが必要ではないでしょうか。高校の連盟においては、七つの支部にわかれていますから、その支部では、写真についての根本の知識、つまり、暗室技術はもちろん、作品の批評や、討論をする。そして、連盟では、それらの上にたって講習会を開く。つまり支部では、一番金のかからない、批評会や討論会を数多くもちいたいのです。

真に、写真が自分の物になったとしたら、つまり、手や足のように、自由にあやつることが、できるようになったとき、写真は、すばらしい芸術であるとともに、我々、写真部員、いや、全高校生の無言の社会に対する、批判となり進歩となるのではないでしょうか我々は、写真を自分の物にするまで努力しましょう。

高校学写連・会報委員　山田　隆

短大写真部のあり方

四年制大学写真部組織とは違って、短大（二年生）の写真部組織は、役員問題、キャンペーンをおこなう場合にギャップが何らかの意味で生ずるのは言うまでもない。そこで四年制大学組織運営を作らないで、個人、個人が写真に対して意味あるものを取得し、または全力で、取り組めるように、短大における組織運営体を新らたに設けて、写真部活動をおこなう傾向が、去年四月頃から考えられていた。そして先日関東総会において、関東学生写真連盟第8支部として、短大だけの支部結成に至ったわけである。それまでの短大は、四年制大学の支部に属していた学校もあり、他校に対して、活動しにくい態度も見られた。写真技術的にも差があり、少しでもそれを短大同志手を取って、なくそうと努力したいと思う。これらは関東だけではなく、全国の短大の間でも同じだと思う。そこで全国短大に、関東では短大支部として第8支部結成旨を通知したところ激励の返事が来ました。

第8支部の活動として、今年十一月頃迄の企画をたてて、春には一泊三日の予定で「本栖」において、合同合宿をおこない、その場で一層充実や、親睦をはかる。合同キャンペーンの型で第一回支部展を発表するのが、大きな行事である。これのテーマとしては、「東京の伝統的なもの」と決まった現在、日本古来的な存在を忘れがちな東京に対しての旨である。さらに夏休み合宿には、共通テーマを各校で追求する事に決った。これらが主な行事である。

短大写真部員は、一年、二年というものの実際には、同年次と同じく部活動をおこなっている。そして二年生は卒業近くなると、一年が活動なりを続けていかなければならない。そういうことで、友人的つながりで部を組織している。これは四年制大学には見られない。例えば、一年生と四年生の隔たりは、同じ部内にいて、知らない場合がある。活動している人以外は特にそうではないかと思う。ところが短大においては、みんなが知りつくしている。そういうサークルで、一つのキャンペーンや、合同合宿をおこなえば、何か変った意味のあるものを、写真を通して、発表できるものではないかと思う。この利点を生かして、短大なりの写真部として、活動していきたいと、思う次第である。

（柴　光生・富士短期大学）

全日会報第55号の原稿を
募集しております

送り先　武蔵野市吉祥寺本町
[redacted]　幡野　弘

締切日　3月15日

《感度100！カラーの《SS》です》カラープリントの美しさを存分に味わってください。オレンジ色のネガが威力を発揮。高感度で粒状が細かく大伸しても全く平気です

フジカラーN100

35mm20枚撮420円　12枚撮290円　6×6cm6枚撮330円（各現像料別）

《カラースライドの楽しさを…》　スライドの楽しさを存分に味わってください。美しい色の冴え、輝きは抜群です。高感度で動きのあるものもシャープにとらえます

フジカラーR100

35mm20枚撮740円　6×6cm6枚撮530円（各現像料込）

富士フイルム

新入生指導を受けて

私達のクラブでは、四月から新入生技術指導班というものが設けられ、写真の技術的指導と、思想面における助言・意見交換等がおこなわれた。写真というものの性格から、これ等の指導は適切であったと思われる。技術指導では、カメラの操作、現像のプロセス等一般的な知識から、スクラップブックを利用してのアングル・露出ピントにおける問題などの討論が主におこなわれた。又、思想の面においては、写真の歴史から、現代写真家（国内、国外を問わず）の思想的立場を知り、芸術に関する思想書を読み、討論などがおこなわれていった。新入生指導において私が得たものは前に書いた言葉で表わされるような断片的なものではなく、それらが複雑にかみ合った、写真を通しての自己変革であったと言い得る。例えば、コンタクトを見て、トーンの話が出ると、なぜ私はそのようなトーンを写し出したのだろうか、ということが追及されてくる。写真が表わし得るものは、現実だけである。それは、単に被写体がなければ、写真は写らない、ということだけではない。たしかに被写体が無いということは決定的かもしれないが、問題にすべきは物がそこにある、という必然性と私がそれを撮る、という必然性のかみ合わせである。この過程を経て写された物は、もはや物ではなく事になる。そして、トーンの表現する微妙なニュアンスによって私の事に対する見方の正否が論ぜられる、ということなのである。私が指導期間中に読んだ本は、シュールレアリスムに関する本、フロイトの『精神分析入門』『芸術論』などかなり片寄った本であったわけだが、これらが、私の写真に対する考え方の第一歩になってくれたことだけは間違いない。アンドレ・ブルトンが言うように、『私は、夢と現実という、この外面的には非常に対照的な二つの状態が、いずれ一種の絶対的な現実、言いうべくんば、一つの超現実のなかに解消するであろう』と、いう言葉はまだ私の心に強く残っている。読んだ本は数少なかったわけだが討論する場合には、文学作品・芸術論・政治思想など、他方面にわたって話し合いがおこなわれ、たいへん楽しい班会を持つことができ、今でも有意義であったと思っている。指導期間中におこなわれたことは、写真展を見たことは、もちろんのことであるが、絵画の展覧会、例えば九月に高島屋で開かれたホープ60年展などを見に行ったことである。写真を考える上で、私が思うには、絵画は切り離してはならないことだと思う。ライティング、コンポジション、色彩（白黒写真においてもいえる）等の問題は、やはり関連づけて考えるべきものだと思う。この展覧会では、私はあまりたくさんのものを吸収することはできなかったが、彼らフォービズムに属するといわれる人々の色的冒険心は注目したいと思う。以上述べたようなことと並行したクラブ全体の例会や、撮影会などによって私達は写真というもののかすかなアウトラインをつかむことができた。『自己変革』という言葉を前の方で述べたが写真を撮っていく上で（私達文化サークルに属する者が心がけねばならないことは、写真を撮るということである。美しいと感じたことを、何故美しいと感じ、そして写真にするか、ということなのだ。すべて自己中心的に考える人間であれば、美しいから美しいのだ、ということになるしかしここにおいて一つの誤りはあるものを、美しいと感じた時、そうすることを正・または否とする判断力が欠けていることである。美しいと感じることが正しいのだ、という判断が下せた場合、また逆に、それは正しくないのだということを知った時、その人間はあきらかに、少しではあるが進歩したと言い得るのである。話題が少しそれてしまったようであるが、このことは私が指導をうけたということの中核を成しているものだから記録しておかなければならない。

もう一つ注意しておきたいことは指導（あまり適切な表現ではないのだが）する人のパーソナリティーである。言葉上で考えれば矛盾が生じる。何故ならば本来は上級生と言えども写真に関しては素人であるはずだ。だから教えることはできない、せいぜい助言程度であとは、お互いに話し合い、共に学んでいくということ以外はできないのである。そのように（今だから、こんなことを言えるのかもしれないが）対処できる人でなければ私達新入生は迷ってしまっていたことだろう、と考えるのである。また新入生を迎える季節になったので私の経験と感想を述べてみた。

（小林　敏雄・明治大学）

高校と締結?

一月十五日、明治大学サロンにて、関東学写連、代表委員大学五名高校五名出席のもとで、高校学写連との緊密化をはかるために話し合いがおこなわれた。

一、大学・高校行事計画の突き合わせ。

一、連絡機関の設置。

大学・高校学写連は、諸活動（文化運動）を推進していくにあたり、協同でプランニングすることとなり、両学写連に委員会を設けた。委員会は、大学五〜六名（代表委員一名を含む）、高校十名（代表委員三名を含む）で構成され一週間に二回〜三回合同委員会が開催される。

（編集委員）

悩みの

高校写真サークル

我々は、複雑な社会に存在している。そして、写真という媒体で文化活動、すなわち文化運動（自己の意識の変革）をおこなっている。我々が、運動をおこなうのに心掛けることは、「まわり（それは、精神的、肉体的をも含めた自分の身近なもの。例えば、家族、学校、サークル、対人関係、etcである。）の把握。」と、「写真を撮るということは、どのような意味をもたらすか。」を明確にし、解明することなのである。しかし、高校写真サークル員は、この二つのことを「あたりまえ」と考えたり、あるいはもっと悪いことには、忘れているのである。それでも、サークル員が、活動をおこなっているということは、満員電車に押し込められている一人にすぎないのであるし、サークル員が、このような状況の下で、運動をしようともがいても、空回りとなり、「なにをもなし得ない」のである。

高校写真サークル員は、今後の進路のために、時間を浪費できない、という環境で作画活動をおこなうのである。

この雑然とした社会の中に、不可解なことが無数にある。太宰治が、「自分の知らないことは、書くな」といったそうであるが、その「知らないこと」を知らないというままにしておくのではなく、意気さかんなサークル員は、不可解を写真という媒体で、自分の問題として、追究し、解明することである。

自分の問題を、第三者のような傍観的でなく、また、他律的でもなく、個人が、自己に疑問を課し積極的、自律的に現実とかかわりあいをもち、個人が、自分の問題を、自分にとっての問題として、把握しないかぎり、その問題は、本質的、根本的にも、なんら解決しないのである。全日活動の主体であった。キャンペーン「状況ー一九六五」に参加する場合においても、会員は、強制によって、無理失理参加するのでもなく、シャッターを押し、写真を提出するだけのものでもない。それは、個人が、自分のおかれている状況のなかで、のっぴきならない問題を、現実（被写体）を通して、どのように表現するか、いかに対処するかを考えることなのである。さすれば、おのずから個々は、形式的にとらわれた活動から脱皮でき、意味ある運動になるのです。

写真を撮り、写真を観ることで、自己の意識の変革をしていくことであるから、そこには、大学生、高校生という差別もない。また、教える立場、教えられる立場ということも存在しないのである。

サアー　写真を撮ろう!!

（S生）

各地区　新委員長語る

発展段階へ

北海道・委員長　庄野俊明

北海道学写連は、現在においても、全ての段階において、着実に発展の一途を経て、これからもまた、前進しようとしております。これからの連盟を考えるならば、現時点において、学写連主体の方向性が、さけばれている現在、道学写連としても、もはや、基礎段階から、発展段階に来ているのではないかと思われます。このことを前提に、我々が、最も必要とするものは何か、ということについて考えねば、当然、現在のこの組織、各サークル、それに個人（会員）について再度考えなおす必要があるのではないかと思います。

つまり、学生サークルとは何か、いうなれば、これは、個人の集まりより成り、それが、小サークルへ発展し、また、大きな一つの組織へと発展してゆくはずです。

その一つとして我々は、キャンペーンをおこなう。この活動に参加することにより、考え、行動し、何らかの形で、自分自身に会得しなければなりません我々は活動を写真を通しておこなっていくわけです。

道学写連は実質的企画として

(1)学写連の組織の拡大、確立

(2)写真の全体的レベルアップ

これを、本年度の最大目標とし、活動をおこなう。

抱負

東北・委員長　吉田健一

私の抱負は、基本的に全日路線で行き、東北独自の運営に移って行こうと思います。

まず、会員の入会についての問題、それに、連盟の活動に参加していなかった各県などを、今後どのような体勢で行くか、それに、東北学写連と全国の各写連盟とを比較し、論じ合いながら、また、新しく連盟に入った学校問題などの運営を、現実として、取り組んで行きたい。

現在、連盟運営にあまり参加の少ない、青森、秋田、岩手などの事柄を特別にして、今後の東北学生写真連盟の主なものにして行きたいと思う。

このように、写真部部員全員が、自己認識を含めた意味で、写真に対する認識を深め同時に写真サークルにおいて、自我の養成を行いたいと思います。

連続する出発点の中の昭和四十一年

関東・委員長　大橋重則

文化運動は、写真活動を通して意識・自己矛盾・意識の変革という一連の過程を前進しながら、我々自身の内部に骨となり肉となって形成されて来たのである。その過程における自己内部の葛藤が、いかに激しいものであったかは、彼の確呼たる思想が明確に表わしている。

我々自身が存在している社会には、多くの矛盾と、多くの夢幻的平和が存在している。多くの矛盾は、すべて人間が作りだしたものであり、たくましく現在に存在している。多くの夢幻的平和は、矛盾が長い年月を経て巨大な壁となって、人々の前に出現した時に、人々の物の中に芽生え、そして、矛盾がしぶとく、たくましくなるに従って大きくふくれあがり、人々は、その中に没入していった。夢幻的平和とは、決して他人と手を結ぶことはなく、それ自体は、いつも自分個人の社会的状況に適応したところで、滞まるものであり、矛盾とは、いかなる社会的状況にあっても、入り込む余地があるならば、無限に、成長するものなのである。夢幻的平和とは、社会状況に、条件を受けるものであり、矛盾は、社会状況を左右するものである。従って、我々自身が夢幻的平和の中に没入し、その範囲内でしか物事を考えない状態であるかぎり、矛盾を解決することは不可能である。矛盾を解決する出発点が、夢幻的平和を自ら捨て去ることだということが、概念としては理解していても、実際には先きに矛盾が解決できるという兆候が如実に、かつ、具体的に、目の前に存在しないかぎり、行動としてはそれをすることができない。

今の状況の中で、唯一の可能性を秘めているのは、個人と個人が手をつなぐことである。少くとも文化運動、すなわち、永久の進歩状態を、人々の精神の中に植えようとする活動を、行っている人には、理解できる筈である。そして我々写真を文化運動の手段として考える者は、すでに言葉よりも写真の方が有効であるということを知っているのである。我々は今、連続している出発の中の一つに立っているのである。すべての用意は出来ている。世の矛盾を人々に訴えるより、我々が、それを打ち破ってみせよう。よりよく生きる、人間らしく生きるということを、人々に知らせるより先に、我々がそうなってみよう。そうしなければ人々は、我々の写真を理解してくれないから……

運動の展開

中国・委員長　岩槻　武行

我々は主体性を喪失して、展望のない曖昧な生活をしている。そして、我々が、学問と称する対象も、認識の段階に留まり、その認識に賭けてみることを忘れ、自己と学問を分離さしているのでなかろうか。サークル活動も、自己と分離し、今だ低迷の状態を辿っているといえよう。中国学写連は、特にひどく現われている。今や、個人も、サークルも、そして連盟自体も、本質を見失いつつある。

一方、現代の閉鎖的な状況の中で、一個の主体が新しい創造をおこなうことの困難性は、状況そのものにある。そしてまた写真の表現過程は、カメラの全く非人間的なメカニズムを媒介にして成立するという、媒体そのものによる困難性もある。それらは、我々が現実に対して目を向けようとしない点に根本的な問題がある。

今までの中国学写連の活動は断片的なもので終っている。そこで「我々自らが、現実に対して如何なる意味を持つか認識しその認識を自らの行動に賭ける」方向をとり、同時にサークル、写真の意義と関連性を考え合っていきたい。そして、これに基づいて、写真の向上と、組織の充実を計りたいそうすることは、個人の発展、サークルの発展につながるものである。

全日カメラキャンペーンを中国地区に浸透させなければならない。「展望のない、主体性を喪失した生活から、脱却するための我々の運動」であり、個人サークルの建直しを計ろうとしている。各、個人は今までの状態で譲歩とか、満足することは許されなくなるだろう。そして安易な自己満足、偽りの解決法（自分との遮断により、問題を解決しようとする）を捨て、自己の認識と自己の特権（写真）に自らを賭けるであろう。すなわち個人は、自己の主体を確立し、現実（被写体）をカメラを通して描くわけである。自分の写真を撮るわけである。

中国地区は、眠れるブタである。我々は眠りから醒め、運動をおこすのである。

「活動を始めて二ヵ月」

中部・委員長　長谷川亀夫

過去三ケ年の諸事業の資料に基づいて、中部連盟の充実と進展を計る活動基本方針七項目。

1、支部活動停滞の打破

2、キャンペーン活動への積極的参加

3、各クラブ低迷の原因解決

4、北陸地域への積極的援助

5、機関紙の発行

6、月例研究会、フォトセミナールの参加

7、学生写真の向上

と、それを、具体化した66年度事業計画を作成、秋季中部総会で承認を得て、66年度の活動を開始して、二ケ月が過ぎた。

事業計画の中で新設は、機関紙の発行（年3回）と部長級合宿（リーダー合宿）である。機関紙は創刊号が一月中には、中部地区全域と、各地区連盟に届きますので、主旨、内容は、おわかりと思い、ここでは省略します。部長級合宿は、基本方針の、各クラブ低迷の原因解決のためおこなうが、この合宿においては、フィルムー写真完成までの過程において、各リーダーより各大学の自信のある部分の研究発表をおこない、それに基づいた資料を作成、それを新入生の指導書にしたい考えである。

このように、66年度は、各サークルの相互活動と、発展のために、事業をおこなう。時間的に限界と思われる強行な、スケジュールであるが、各大学発展のために、一年間を通して積極的に参加していただきたいと思います。

個人の確立から組織の充実化

関西・委員長　富岡　昭夫

一に「写真について考え直す必要があるのではないか?」我々が行動するにあたり最も重要な「写真とは何か」ということを考えるのに、余りにも怠惰ではなかっただろうか。我々はもっといろいろな事を勉強しなければならないし、写真について考えなければならない。そうすることによって、自分は写真によって何を為さねばならないかを明確に把握でき、またサークルの行事においてもおのずから必要なものと、そうでないものとがわかるはずである。これに基いて、各支部単位、あるいは合同で、フォトゼミナール・作品批評会・講演会等を行っていく予定である。

第二に「組織の充実」ということであり、組織の充実、強化ということは、支部活動をいかに発展させるかということである。支部が活動を、円滑におこなえるよう調達、指導するのも今年の大きな課題である。支部活動を充実させるには、個々の行動を単発的におこなうのではなく、長期的に一貫した目標に沿った行事をおこなうべきだと思う。

第三に「加盟員に対する連盟意識の徹底」

連盟をもっと魅力的なものにするために、もっと発展させるためには、各クラブ、各部員と密接な接触をもたねばならならない。個々の部員とは、間接的な接触の場合も多いが、特に直接的なものは、今までより、一層にはかっていかなければならない。今年度は、写真のつどいキャンペーンなどを利用して、これらの行事にできるだけ多く参加してもらい連盟意識を高めていきたい。また、新しい試みとして、関西学写連の機関紙を発行して、部員一人一人に直接に呼びかけ、働きかけたい。

抱負

四国・委員長　田中隆弘

いわば、マンネリズム化した四国学写連の低迷をなんとか、打破したいと思ったので、連盟の任事を引き受けたのが直接の動機といってもよい。さて、今年度の抱負は、すなわち、全日本部からの連絡を、各支部に徹底させ、また、各支部の下からの盛り上がりに期待し、それを暖かく育ててゆきたい。そのために、新入部員の入った活気にあふれた各支部及び、大学の指導者を、一泊程度の合宿を、昨年同様におこない、そこで徹底的な討論をおこない、今後の各支部の活動の一助に供する予定である。連盟のコンテストは、昨年同様六月頃におこない。これは主に個人作品を中心にしておこなう。秋に「四国学生写真の集い」を開き、その大会の時に、各大学の共同制作の発表討論の場を持ち、ここから、各大学間の会員の親睦と交流を起こさせる必要がある。また支部写真展の交換会とか、合同写真展の形で相互の技術向上を計りたい。また、今年度は中・四国学生写真大会が、四国側の高知支部の許しで開催されることになっている。すでに、3回目の中・四国大会準備委員会を終り、準備は着々進んでいる。今まで述べた事には、高校生対策、それと連盟組織強化策の問題に対しては、指導者合宿において、討論を行ない、各支部においても、同様に強化策を練り、強力な四国学生写真連盟としたい。

第五十四号の紙面掲載と編集上の都合により、一部原稿の修正をしました事をお詫び致します。なお寄稿されました方にお礼を申しあげます。さらに敬称略をさせていただきました。

（編集責任者）